

神奈川大学人文学会五〇年史に代えて

二〇年をかえりみて

山 本 新

人文学会は昭和二八年に創立されたから、昭和四七年度で二〇周年を迎えたわけである。一〇周年のとき、機関誌の「人文研究」第二四集を記念号として出してから、もう一〇年の歳月が経過した。この記念号の「二〇年の回顧」という一文のなかで、当時の委員長であつた草薙正夫教授（現神奈川県立短大学長）がもらした念願のいくつかは、すでに達成されている。外国語学部は昭和四〇年に創設されたし、年三回の発行であつた「人文研究」は、昭和四六年度から季刊となつた。学部の創設と学園紛争を通じての学内改革とのおかげで、学会スタッフが充実してきたからである。紛争は、大きくみれば、本学の過去の構想を一変し、自律性の自覚と自己決定の制度を誘発し、ひいては各自の研究意欲を活発にしつつあるといえるであろう。

人文学会は、他大学のこの種の学会と比較するならば、いくつかの特長をもっている。学部の背景もなしに、一般教育関係の教師をメンバーとする学内学会として出発したにもかかわらず、かなり高い研究水準を保ち、活発な

研究活動を持続してきた。たとえば、年間に何回か長論文が書けるという機会は、一般の通念からいえば、稀有のことであり、それらは相互の研究意欲を刺激せずにおかなかった。そこから一〇指に近い学位取得者があらわれたのも当然であろう。学外の諸学会の注目をひき、かなりの評価をうけてきた。全国的な学会誌その他に「人文研究」所載の論文が紹介され、批判されたことはしばしばであった。

のみならず、機関誌を出すほかに、神奈川叢書と名づけて出版活動も行い、A・ウェーバー『文化社会学』（昭和三年）、論集『伝統と変革』（昭和三六年）、カール・レーヴィト『世界史と救済史』（昭和三八年）を共同研究として出してきたし、また学生向けに新書型で『学生とともに』（昭和四一年）をも出した。その後、企画が消化できず、もたついているところに紛争がおこり、数年間中休みしていたが、今年度からふたたび新たに出版企画をたて、再起をはかっている。

学内の学会として特長的なもう一つのこととは「教授部会」に呼応して「学生部会」をもっていることである。学内の学会は、教授らの研究だけのものではなく、研究が教育に、ひいては学生の学習活動に結びつき、教育的機能をはたさねばならぬという考慮から、学生の手による学問追求の場を「学生部会」として設定し、学会活動の一翼としたことは、人文学会の際立った特長の一つである。学生部会は人文系ゼミナールの学生を主軸として昭和三二年に創設され、年刊の機関誌「世代」をほぼ毎年出してきた。本年度で二一号を数える。これらに載せられた文章には目をみはるものがある。また、今少し機動性のある機関新聞「人文会報」を昭和三八年に創刊し、年ほぼ三回の発行で、現在二二号となった。紛争以前の数年間は学生部会の活動が頂点に達した時期で、講演会、シンポジウム、インナーゼミ発表会などが多彩に催され、ゼミ誌のいくつかが学会援助によって出され、本学の学生活動の

なかで特異な位置を占めていた。紛争は学生部会にも大きな打撃を与えた。それでも、「人文会報」はつづけられ、紛争に対するノンセクトの反応を示した。「世代」もどうやらつづいている。昨年度より、教授部会の再起に呼応して、学生部会も地道な基礎がためを進めており、新しい自覚のもとに再興する日も間近いであろう。

かえりみれば、本学会の創立に立ちあい、実質的にこれを支えてきた何人かの同僚は、紛争の直前、直後に本学を去った。惜しい方々であつた。なかには物故された方もある。これらの有力な同僚を失った反面、より多くの、有力な同僚を迎えた。なお、これからも迎えるであろう。われわれは過去二〇年の実績をふりかえり、過去の多彩な活動のすべて（出版活動や学内、学外の講演会や学生を混えた討論会やインナーゼミ等々）をふたたび取り戻したいと念ずる一方、新しい自覚をもつて、創意と工夫を働かせ、着実な次の一步を踏み出したいと念ずることが切である。本学会は、まだまだその潜在的可能性を十分に出しきつてはいないと思うからである。

（『人文研究』第五五集、一九七三年より再録）